大河津分水の恩恵

洪水被害の軽減

大河津分水路の通水によって信濃川下流域の本川や支川の水位は大きく低下することになり、洪水の発生を未然に防ぐ効果が発現しました。

信濃川下流域と中ノ口川流域の本支川における水害の発生は、1620年から通水の1922年までの303年間で106回を数え、その頻度はおよそ3年に1回でした。横田切れに代表される被害の大きな水害も、この期間に発生しています。しかしながら、1923年以後でみると2025年までの103年間で11回と、頻度はおよそ9年に1回へと減少しています。

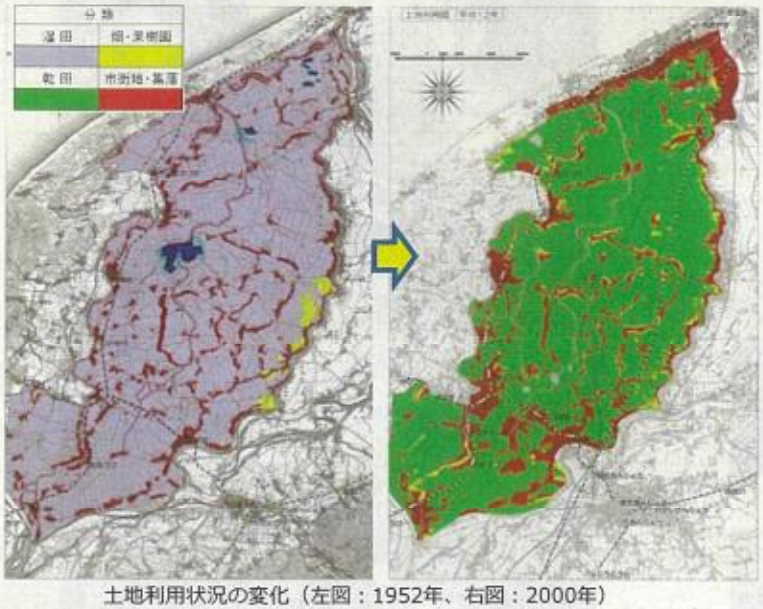
水害発生件数の推移（信濃川下流域、中ノ口川流域）

出典：1620年～1909年：信濃川大河津分水誌　第1集、1910年～2015年：新潟県農林部「新潟の米百年史」、信濃川下流30年史、信濃川下流HP「過去の洪水・水害」

大穀倉地帯への発展

湿田と乾田の稲刈りの状況比較（左：湿田、右：現在）

大河津分水路通水以前の越後平野は、芦沼が広がる泥深い田んぼが多く、腰まで水に浸かりながらの稲栽培がなされ、収穫された米の質も悪かったため「とりまたぎ米（鳥もまたいで食べない）」と言われていました。大河津分水路の通水によって洪水被害が減少、信濃川下流部の水位低下による排水性の向上、土地改良の進展も伴って、旧西蒲原郡の水稲の生産高は約2～3倍になり、信濃川沿いの耕地は全国有数の美田に生まれ変わりました。



土地利用状況の変化（左図：1952年、右図：2000年）

[期間]　[出典]

出典：明治38年～昭和22年　新潟県水稲増産育成事及推進協議会編（昭和38年3月）「水稲増産育成事業の発展」より引用

昭和23年～昭和37年　農林省新潟統計事務所編（昭和38年10月）「農作物累年生産統計表」より引用

昭和38年～昭和43年　北陸農政局新潟統計情報事務所編「市町村生産統計」より引用

昭和44年以降　北陸農政局新潟統計情報事務所編「新潟作物統計」より引用

平成11年以降の西蒲原郡データは新潟市・燕市・弥彦村の合算データを記述（市町村合併に伴うもの）

かつての潟を干拓し田んぼを整備した場所もあります。